



身体の測定とその表象—19世紀末フランスにおける 科学と映像技術—

増田, 展大

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2013-11-27

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3235号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003235>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要約

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

身体の測定とその表象
——19 世紀末フランスにおける科学と映像技術——

氏 名

増田 展大

(注) 4, 0 0 0 字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

本論の目的は 19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスにおける科学者たちの実践に着目し、彼らが用いた映像技術と科学的言説の関係において、身体がいかにして測定され、表象されたのかを考察することにある。本論を構成する全四章では、それぞれ一人の科学者の実践がとりあげられ、さらに各章を横断するかたちで医学と解剖学、生理学と心理学といった科学的諸領域が重なり合うことになる。これら世紀転換期の近代諸科学に共通するのは、人々の身体を測定し、その結果を表象することに並々ならぬ労力を費やした点にあった。なかでも、1880 年代の瞬間／連続写真の登場に着目する本論は、全体を通じて以下のような問題に貫かれている。すなわち、近代の科学的な知が編制されるプロセスにおいて、身体を測定し、表象する映像技術がどのような役割を果たしたのか。またそれとは逆に、現代につながる映像技術の問題を論じるうえで、彼らの科学的実践がどのような批判的意義を提示し得るのであろうか。

四人の科学者たちとは、各章の順にエドモン・デボネ、アルベール・ロンド、アルフレッド・ビネ、ポール・リシェである。各々の専門分野について言えば、デボネ教授は写真を用いた身体鍛錬術を創設した人物であり、ロンドは臨床医学における連続写真の有用性を訴えた写真技師である。さらにグラフ法を用いて黎明期の実験心理学を展開したビネと、精神科医と美術史家という立場から美術解剖学や彫刻製作に新旧の複製技術を応用したリシェの実践が続く。連続写真と映画技術が登場したことで知られる 19 世紀末という技術的転換点については従来、生理学者 E.J. マレーと神経科医 J.M. シャルコーによる視覚的实践に数多くの先行研究が費やされてきた。その周縁に位置づけられる先の四人の名前は、必ずしも著名なものではない。

しかしながら、二人の大科学者の実践が多様な映像論を喚起してきたという事実は、この時代の科学的実践において映像技術が重要な役割を果たしていたことに起因する。言い換えるなら、多様な映像技術の問題が、「見ること」と「見せること」、さらに「知ること」を緊密に結びつける近代以降の科学的諸実践には否応なく介入していたのである。二人の中心的人物から展開しつつも、映像技術に意識的な言動を数多く残した四人の実践に注目することは、近代諸科学の理論的言説が映像技術の実践とどのように絡み合っていたのかを明らかにし、さらには従来の映像論とは異なる観点からこれまでの議論を批判的に再考することを可能にする。換言するなら、写真から映画へという単線的な映像史観のもとで視覚装置を介して身体が規律訓練される様子をイデオロギー的に告発する従来の考察とは異なり、理論的言説と技術的実践の双方向的な関係性において科学的な知と認識論的な萌芽が立ち現れるプロセスを認めること、それによって現在にまで続く映像メディアの新たな側面を照射することが可能になるのである。

序論では以上のような目的のもと、先行研究の批判的再考と理論的な準備作業が進められた。本論の先行研究には従来の写真論や映画論に加え、そこから展開した視覚(文化)論が含まれる。前世紀末に登場した後者は、W・ベンヤミンの複製技術論と M・フーコーの考古学的方法論に着想を得ると、高級文化に限定されない近代以降の様々な文化事象を考察の対象としてきた。とりわけ、身体が問題となる場合、それらが目指したのは写真や映画をはじめとする映像メディアを介して身体がいかにして構築され、政治／社会／歴史的なイデオロギーに絡めとられてきたのかについての批判的考察であったと言える。なかでも、A・セクーラと J・クレリーによる諸論考は、19 世紀を通じて科学的言説のうちに特定の視覚技術と接続された身体の「表象」が立ち現れ、実証主義的かつ機械論的な科学的言説において人間の視覚そのものが「測定」の対象になったことを明らかにした。彼らの議論が数多くの刺激的な論点を指摘した一方、近代社会の政治的イデ

オロギーの問題へと収斂した結果、その後の議論が身体の疎外ないしは規律訓練を強調する傾向にあることを本論は問題視する。

科学的諸言説における人間と技術の関係を考察するとき、そこに近代以降の機械論的な認識様態が強く作用していることは疑いない。とはいえ、多くの先行研究が紋切り型の結論を再生産することになったのは、既存の技術装置を言説レベルに設定したうえで、そこから一方向的に人間の認識論の様態を説明しようとしたことに起因するのではないか。そこで本論は、近代社会の技術的合理化が押し進められるなかで、映像技術を応用する科学者たちが垣間見せる「失敗」や「無意識」、または技術的な「不具合」に敢えて留まり、それを「身振り」と「機械」という観点から捉え直していく。そのような作業を通じてこそ、人間が一要素として組み込まれた技術的布置とそこに胚胎する認識論の可能性を確認すると同時に、科学的な知が理論的言説と技術的実践の相互作用において編成される具体的なプロセスが明らかになると考えられるからである。

第一章はまず、この「身振り」という観点を明らかにするため、写真技術を多用した E・デボネ教授の身体鍛錬術を考察する。優性学的認識を体現する彼らの実践を身体の規律訓練の事例として考察する先行研究に対し、細部までギリシア彫刻を模倣してポーズをとるデボネ式身体鍛錬は、むしろカメラの前に嬉々としてみずからの裸体を差し出し、その分析や測定、展示や競争化といった諸原理において写真のなかではじめて可能になる視覚的实践であった。ここに認められる身体の「カタログ化」や「スペクタクル化」において、身体鍛錬による正常な身体の表象は、それとは一見異なる同時代の映画俳優や舞台俳優、さらにヒステリー患者の身体表象と共通する。すなわち、映像技術を介した「わざとらしい」演出において、彼らの身体はともに内面や意味作用を欠いた表層的な身体を前景化するのであり、それら表層のレベルにこそ、映像技術に対する独自の身体技法が認められるのである。最後にジムナスティックを展開した G・ドゥメニーの連続写真とデボネのステレオ写真との比較によって、写真のなかで光と影、静止と運動、平面と立体のあいだを往還する「身振りとしてのポーズ」が指摘されるのである。

これら「規律訓練」と「スペクタクル化」という問題は、近代社会において身体が置かれた状況に対する表裏一体の問題でしかないのかもしれない。そこで第二章は瞬間／連続写真の撮影者に着目し、この映像技術が身振りの媒介関係においてどのように機能したのかを考察する。それは同時に、クレリーが 19 世紀に措定した観察者概念と、彼が言及することの少ない写真技術との関係性を再考する作業にもつながる。マレーと同様、「見ることと知ること」を結び付ける瞬間写真の「可視性」に熱狂した A・ロンドは、シャルコーの臨床医学における画像診断の意義を訴えた写真技師であり、結果として瞬間写真を並び替え、その連続性を編集することにもなる。それは、窃視的かつ技術愛好的な「可視化」の欲望に動機付けられた実践であると同時に、科学的ないしは芸術的な観点から身体運動のリズムそのものを捉えようとする点において E・マイブリッジの実践とも共通する。とはいえ、二人以上に「瞬間」の操作可能性に固執したロンド式連続写真は、ヒステリーの言説が想定する「神経学的な身振り」のリズムとの同調を試みるものであった。その結果、この写真技師が、肉眼では知覚不可能な臨床医学的な視覚性を身体化していたことが明らかとなる。すなわち、「科学者の網膜」に喩えられた写真の実証性を超え出て、彼は「真の網膜」の機能を果たす連続写真機の自動的かつ機械的な機能においてのみ実現可能な身体運動を追求していたのであり、このような写真技師の「視覚的身振り」にこそ、観察者と写真機に固有の関係性を指摘することが可能になるのである。

これら本論の前半部分が「身振り」に焦点化したのに対し、後半部分では「機械」の具体的な機能がメディア論的に考察されることになる。なかでも写真や映画に先立ち、運動を自動的に記録するグラフ機器が、人間の心理を可視化しようと試みた黎明期の実験心理学においてどのような機能を果たしたのか。このような問題をA・ビネの実践を通じて考察したのが、第三章である。18世紀末以降のグラフ機器の歴史は、ドイツ生理学から実験心理学が独立するプロセスに重なりあうと同時に、単純反応の時間測定に付随する「不確実性」の問題を明らかにする。ただし、それは必ずしも否定的に理解される観点ではなく、観察者と被験者と技術とのあいだで「心理」という認識論の対象を引き起こすように作用していた。連続写真に取り組む以前、そのグラフ法をフランスに広めたマレーもまた、この自動機械の機能を主観と客観の埒外にあつて、観察者が抜け落ちた新たな研究領域を開示する新たな感覚器官として理解したのである。さらにビネの実践においてドイツ生理学の系譜は、被験者を自動機械として理解するフランス精神医学の伝統と合流する。グラフ法によって言語活動を解体し、人間の無意識にまで到達するビネの技術愛好的な態度は、生理学と心理学を横断可能にすると同時に、自動機械としての反転可能な同型性を取り結ぶ身体と機械についての認識モデルを明らかにするのである。

これら自動機械としての特性が従来の再現＝表象のメディアにどのような影響を及ぼすことになるのか。この問題を考察した第四章において、その具体例となったのがP・リシェの実践である。シャルコーのもとでヒステリー患者を記録する挿絵画家として活躍した彼は、ロンドとともに正常／異常な身体運動を数多くの写真に記録すると、最終的にはエコール・デ・ボザールの美術解剖学者として、それらの知見を彫刻作品へと結実させることになる。デカルトや先史人、三美神といった歴史的にのみ鑄造可能な形象が、諸々の複製技術によってあくまで自然主義的に復元されたのである。平面と立体を往還する彼が駆使したデッサン、写真、型どりといった複製技術の細部からは、技術的な不確実性が安定した指示参照の関係を脅かしていたこと、さらにそのことが彼の無意識的な欲望を駆動するように作用したことが明らかとなる。このことを指摘した「形象的なもの」という観点から考察するとき、リシェの実践は20世紀末のデジタル技術の登場に直面したニューメディア論の言説と少なからず共通点をみせると同時に、そこで強調される「再現＝表象」や「シミュレーション」といった観点の批判的再考を可能にするのである。

以上、世紀転換期の四人の科学者たちの実践における身体の表層的な身振りと機械の技術的深奥との絡み合いを考察してきた本論の意義は、およそ次の三点にまとめられる。まず技術の「発明」を特権化する伝記的記述や単線的な映像史観とは異なり、そこでは見落とされがちな科学者や国境、ディシプリン間で網状に展開する「技術的布置」とも言える状況が明らかとなる。これが水平軸に展開する問題であるとするなら、次に垂直軸にはそれぞれの映像技術が内包する「自動性」や「不確実性」が人間の身振りをその一要素として取り込むことによって認識論的可能性として作用するメカニズムが明らかとなる。最後に、これら両軸の交点において技術的实践と科学的言説とが機械状の関係において相互に刺激し合うとき、身体にまつわる認識様態や科学的な知の編成が立ち現れるのである。「周縁的な」四人の科学者に共通するのはこれら科学的言説と技術的实践とを絶えず双方向的に練り直すような態度であり、そこからは世紀転換期に固有のイメージの運動や作用が明らかとなった。おなじく伝統的なカテゴリーが瓦解しつつある現代の映像技術へと視野を拡げるとき、以上の「技術的認識論」とも言うべき手続きを経てこそ、従来の写真論や映画論と現代の映像文化一般の批判的再考が可能になるのである。